イスラームの信仰を支えるモノやツール②

天理大学人文学部准教授
澤井　真 *Makoto Sawai*

「百聞は一見に如かず」

私たち人間は、しばしば眼に見える事柄に心を動かされる。教えの真髄を理解した信仰者なら、その奥にひそむ神意まで見通すかもしれない。私たちが使用する「百聞は一見に如かず」という表現は『漢書』に由来するようであるが、この言葉は “Seeing is Believing” という英語にも対応する。アラビア語では何と表現するのか確認してみたところ、「al-ʿaynu lā taḥtāju ilā bayān」という言葉に辿り着いた。字義的には、「目はいかなる説明も必要としない」である。いずれの地域であっても、視覚から得られる情報は私たちの生活において重要である。探偵アニメやドラマでは、必ずと言ってよいほど、証言者が「私は確かにこの目で見た」と訴えるシーンがある。こうしたシーンもまた、私たちは耳で聞いたり手で触れたりするよりも、目の当たりにしたものに対する信頼度の高さを示している。

イスラームにおける奇蹟

イスラームでも「奇蹟」という現象が長らく信じられてきた。よく知られているところで言えば、預言者（rasūl）による奇蹟と聖者（walī Allāh）による奇蹟という２種類がある。預言者たちが起こす奇蹟は「ムウジザ」（muʿjizah）と呼ばれ、聖者たちが起こす奇蹟は「カラーマ」（karāmah）と呼ばれる。双方とも超自然的な現象が引き起こされることには違いはないのだが、預言者は自らの預言者性によって奇蹟を生じさせ、聖者は自らの聖者性によって奇蹟を生じさせる。

預言者とは、神による召命を通して預言者となった人々である。「なぜ彼は預言者なのか」という問いが立てられたとすれば、その基本的な答えは「神が彼を預言者として選ばれたから」になるだろう。たとえば、ヘブライ語聖書に登場する預言者モーセはステッキを蛇に変えたり、エジプト軍に追われた際に海を割ったりする奇蹟を見せた。また、イエスは病む人々を癒すという奇蹟を示した。これらは全て、彼ら自身に内在する力ではなく、彼らが預言者であるがゆえに発揮することができた力―神の威光―と理解できる。

預言者ムハンマドが生きた時代では、奇蹟を引き起こすことができなければ預言者とみなすことはできないと考えられた。神からの啓示を受け始めたムハンマド自身も、マッカの人々から預言者の証しである奇蹟を示すように迫られた。それに対するムハンマドの奇蹟とは、啓示された聖典クルアーンそのものであるとされる。言い換えれば、読み書きができなかったムハンマドという一人の男性によって、アラビア語で韻を踏んだ荘厳な啓示の旋律がもたらされたという事実そのものが、預言者としての奇蹟とされる。

この他にも、ムハンマドが戦場で示した戦才や、天上への旅を通して神に見（まみ）えたという話なども奇蹟とみなされてきたと思われる。人々にとって、こうした彼の奇蹟を目の当たりにすることは、彼が預言者であり、教えを信じ始めるうえでの証しであった。一方、後代を生きる人々にとっては、預言者が起こした超人的な現象を奇蹟とみなすことができるかどうかが、信仰者としての線引きとなっていったと思われる。

聖者の奇蹟

イスラームでは「聖者」とみなされる人々の存在は、クルアーンで言及されている。原語の「ワリー・アッラー」とは「神に近き者」という意味である。他の者に比べて神に近い存在という意味が転じて、カトリックの列聖のイメージを背景に「聖者」とみなされるようになった。

「聖者」とみなされる人々には幾つかの種類がある。先に挙げた預言者は、まさに神に近い存在であり聖者である。さらに、ムハンマドと苦楽を共にした教友と呼ばれる人々も、ムハンマドを手助けし、神のために義を為したという理由から、神に近い存在とみなされている。さらに、シーア派ではムハンマドや従兄弟のアリーの血統に連なる人物たちが、神に近い存在と認識されている。

これらの人々に加えて、「スーフィー」（sūfī）という呼称に代表される神秘家たちがいる。彼らは霊的修行を通して神と見（まみ）えることをめざす。神と一体となる合一体験を彼らは「シャハーダ」（shahādah「目撃」や「視覚」の意味）と呼ぶ。一般の人々には隠された神についての知識を得ることで、彼らのなかには奇蹟を起こすことができる者が現れる。「なぜ彼らは聖者なのか」という問いが投げかけられたならば、信仰的には「彼らは神によって選ばれ、祝福（バラカ）が与えられたから」という回答になるだろう。また、「彼らは人々から『聖者』と認知され崇敬されているから」と言うこともできよう。

ムスリムが歴史的に暮らしてきた地域では、日常生活の中において、現在に至るまで多くの聖者廟が重要な位置を占め続けている。たとえば、トルコのイスタンブールには、霊廟を意味する「トゥルベ」（Türbe）があり、今なお崇敬者が絶えない。アブー・ダルダー・アンサーリー（d. 32/652）は、預言者ムハンマドの教友として知られている人物である。彼の墓はダマスカスにあるとされているが、トルコ国内でも彼の墓と信じられている場所が複数ある。イスタンブールのカラジャ・アフメト・モスクや、エユップ・スルタン・モスクなどである。

アンサーリーの墓脇の石柱に石が接着している様子。すでに複数の石が付着していた。（2023 年 10 月　筆者撮影）

そのなかでも、カラジャ・アフメト・モスク脇の墓地内にあるアンサーリーの墓では、石柱に石が張り付くという不思議な現象を見ることができる。2023 年、筆者は友人の研究者たちと一緒にこの地を訪れた。私たちが訪れたときも、年配の参詣者たちが墓を参詣していた。筆者は地面に転がっている小石を拾って、石柱に糊や粘着剤が塗られていないことを確認したうえで、石柱と小石が接着するかを試してみた。そうすると、なんと石同士が接着したのである。人々には、アンサーリーが死してもなお彼自身の聖者としての力を発現している「奇蹟」として理解されるのだろう。「奇蹟」を目の当たりにするとき、ムスリムたちは神の存在を垣間見る。それを通して信仰を強固なものとする。このとき、目に見えるモノは非常に大きな影響力をもつ。まさに、「百聞は一見に如かず」である。